



TITLE:

啓蒙時代に於ける支那研究とその 現代的意義(下)

AUTHOR(S):

島, 恭彦

CITATION:

島, 恭彦. 啓蒙時代に於ける支那研究とその現代的意義(下). 經濟論叢
1939, 48(6): 968-981

ISSUE DATE:

1939-06-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/131252>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京 叢論濟經

經濟學叢論 每月一日發行
 第四十八卷第六號 昭和十四年六月一日發行
 大正十四年六月二十一日第三號郵便特種認可

號六第 卷(十四第

月六年四十和昭

(禁轉載)

論叢

貨幣の中立性について

文學博士 高田保馬

現金通貨、預金通貨及び潜在通貨

經濟學博士 小島昌太郎

時論

戰時貿易の構成變化

經濟學博士 谷口吉彦

研究

貯蓄投資と時間要素

經濟學士 一谷藤一郎

カルブンの秩序と職業

經濟學士 澤崎堅造

警察時代に於ける支那研究とその現代的意義

經濟學士 島恭彦

說苑

幕末の出貿易論

經濟學博士 本庄榮治郎

附錄

彙報

外國雜誌論題

本誌第四十八卷總目錄

啓蒙時代に於ける支那研究とその現代的意義 (下)

島 恭 彦

目次

- はしがき 一 近世歐洲に於ける支那研究の成立 二 支那禮讃論、ヴォルテール、ケネー
三 支那社會の批判的研究、モンテスキュー、マブリー(以上前號掲載) 四 支那の社會經濟的研究、チュルゴー、スミス 五 啓蒙期の支那研究の史的地位と意義

四 支那の社會經濟的研究

——チュルゴー、アダム・スミス——

以上アンシクロペヂストの支那讚美論と支那の批判的研究とを通じて、支那社會の特質、殊に支那專制政治の特殊性は次第に明るみに出されたと言へよう。併し以上の論者の議論はすべて一つの政治形態としての專制主義とこの專制主義にからみついて、これを美化してゐる支那の習俗、道德、觀念形態の研究に集中された觀があつた。これは專制政治に對する批判のたかまつて來たフランス内部の政治的情勢の要求するところであつたであらう。併し專制政治の科學的研究は決して政治形態、觀念形態の表面を上滑りしてゐてはならないのである。と云ふわけは、專制政治は單なる政治形態上の問題ではなく、其國特有の社會經濟的實在の中に深い根據を有してゐるからである。ここに當時のフランスに於てエコノミストと稱せられ、經濟學を以て一種の科學的な政治批判たらしめようとしてゐた重農經濟學派、ケネー達の重大な使命があつたわけである。然るに「重農主義」のもつ保

守性の故に、ケネーは支那的重農主義の外見に魅せられて、終にその物的根拠を突くことが出来なかつたのである。そこで支那研究の一步前進は、重農學派中で最も進歩的な、従つて重農主義そのものをも克服しようとしてゐたチュルゴーによつてなしとげられたのである。

吾々は先づチュルゴーの支那研究を刺戟した外的事情をここで瞥見しておかう。十八世紀の始めルキ十五世の御世にゼスイットに伴はれて高類思、楊徳望なる二人の支那青年がフランスに留學した。彼等の渡來は當時の宰相ベルタン(Berlin)の政治的意圖によるもので、革命前のフランスに於ける社會不安を鎮靜するために支那の道徳思想を輸入することの必要を痛感した爲であると言はれてゐる。²⁶⁾其はともかくこの支那青年は支那文化の紹介者としてフランスに渡來し、近世西歐文化の中心地たるフランスで勉強して歸國したわけである。さてチュルゴーはゼスイットの書簡集などから支那に對して深甚なる關心をいだいてゐたのであるが、この支那青年の歸國に際し、主として支那の經濟、技術、地質、歴史等に關する質問をなし、これに歸國後答へるべきことを求めたのであつた。チュルゴーは勿論當時の經濟學、社會科學が辿りついた理論水準に立つてこれ等の問題を設定したのであるから、これに答へるだけでも相當の豫備知識を必要とする事は言ふまでもない。そこで彼はかの有名な、「富の生産と分配とに關する省察」を著述し、經濟上の問題の理論的な手ほどきを試みたのである。吾々はこの經濟學史上の名著がはからずも、支那青年を啓蒙する目的を持つと同時に、支那研究の方法と理論を提供したものである事實を知る時、深い興味を感じざるを得ない。

いまチュルゴーの著作集に輯録されてゐる「支那に關する設問」(Questions sur la Chine)²⁷⁾を見れば、大體彼が支

26) 後藤末雄、前掲書、五五二頁。

27) Turgot, Oeuvres, edit, par Daire, Tome I.

那に關して如何なる問題を持つてゐたかと言ふ事、從つてまた如何なる方向から支那研究を進めようとしてゐたかを知る事が出来るのである。チュルゴーは先づ支那に於ける富、土地の分配、耕作狀況について質問し、次に技術上から支那に於ける製紙術、印刷術、織物に關する説明を求め、更に支那の地質、陶土について質問し、各種の見本を要求し、最後に支那歴史上の難問に對する回答を求めたのであつた。吾々にとつて最も重要なものは最初の支那經濟に關する質問である。ここでは、三十の問題が設けられ、その中のいくつかにはそれ／＼注意書(observations)がついてゐる。吾々はこれらの質問の背後にある「省察」の理論を顧みつつ、適當に考察して見よう。

先づ農業上の作物、耕作面積、耕作方法等に關する數個の質問がある。チュルゴーは「省察」で地主が直接耕作勞働に従事するか否かによつて農業生産方法に區別を認めてゐるが、この理論に基いてまた彼は支那農業の狀態、地主と小作人の生産關係等を知らうとしたのであつた。彼は支那の土地が地主自身か、小作料を納める小作人か奴隸か、何れによつて耕作されてゐるかと問ふたのはこの理由からである。これに關聯して小作料は收穫量を折半したものか、一定額の銀或は穀物であるか、又地主が耕作用の器具、家畜、前貸資本等を供給する慣習があるかを尋ねてゐる。「省察」の二十七節には自己資本を投下する資本家的小作人は商工業の盛んな北部フランスに見られ、封建的な折半小作人は中部フランスの山間地方に見出されると言つてゐるが、チュルゴーはこの事實に則して、支那に於ても陝西、四川、雲南の如き邊境の地域に折半小作行はれ、河北、江南、廣東、福建等の如き他省より多くの消費と商業の行はれる地方には資本制的小作制が優勢ではないかと推測してゐる。これは結局

農産物の自由賣買や田地の貸借、賣買が廣く行はれてゐるか否かの問題に歸するであらう。而してチュルゴ一の「省察」によれば、農産物の賣買が行はれると共に、専ら工業勞働にたづさはる階級が発生し、土地の私有、賣買と同時に、土地から解放された無産者、土地を集積する地主、貨幣資本家、この資本の投下されたる企業が發生すると考へてゐる。故に次の數個の質問もさう云ふ考へからして提出されたものであらう。即ち「支那には多數の富者が存在するか、換言すれば支那に於ける富の分配は頗る不平等であるか。」「支那には莫大な土地、家屋、領地を所有する多數の人が存在するか。」「支那には大資本を擁して多數の職工を働かせ、多くの商品を製造せしめる多數の企業家が存在するか。」「支那には巨額の資本を有して商業的企業を行ふ多數の商人が存在するか。」「もしこれらの質問にしてその意義をよく理解した上で答へられたならば、そこに支那社會經濟の到達せる歴史的段階の的確な見取圖が得られた事であらう。

以上の質問については、チュルゴ一は「支那には貸金の利子によつて生活する多數の人が存在するか。」と問ふてゐるが、この質問も相當重要な意義を持つてゐる。チュルゴ一は元來土地の私有、貨幣資本の發生、農業生産力の増大と共に社會の一部は生産的勞働にわづらはされない有産階級 (Class disposable) として、學問、司法、軍事、行政等の公務にたづさはる事が出來ると考へてゐた。²⁸⁾ さうだとすれば、支那に於ける如く、官吏志望者が長い間學を修め、數回試験をうけ、就任の準備をすることが出來るためには、必ずこの有産階級と生産階級の階級分裂が存在しなければならぬ。それ故にチュルゴ一は「支那の顯職は普通、如何なる人によつて占められてゐるか、働かずとも收入より生活する富豪の子弟によつてか。或は高等教育を子供に授けるだけ富裕な農夫、製

28) Turgot, Oeuvres, p. 310.

29) Turgot, Reflexions sur la formation et distribution des richesses. 25-215.

造家、商人の子弟であるか。」と質問し、それに次いでかう云ふ家族の財産は貨幣資本であるか、土地であるか、北京其他諸省の長官、閣老、總督の俸給は幾何であるかを質問したのであらう。

以上はチュルゴの支那に關する設問の中重要なものを選択して考察したものである。それはあくまで質問であり、云はゞ支那研究の入口に過ぎない。併し當時のフランスの支那研究者にして、チュルゴの如き支那社會經濟に關する現實的な問題を提出し得たものが果して何人あつたであらうか。正しき問題の提出方法はまた正しき問題の解決方法を含むと云ふ。もし以上の問題が一々正しく解決されたならば、支那專制主義の物質的基礎が明かにされたであらう。そして支那の農業と商工業、土地資本と貸付資本、農民と地主、官吏と地主及び貸付資本家等の關係の如き、支那社會の基本的構成が分析され得たに相違ない。さうした意味に於て、チュルゴの支那經濟についての設問は支那の社會經濟的研究の端緒を切りひらく重要な意義を持つものであると言へよう。

アジア的農業社會、支那の研究には土地所有、農業生産關係より出發するチュルゴの「省察」の方が、マニユファクチュアの企業より始めるスミスの國富論より適當してゐたかも知れない。併し實はこの農業社會を究めるには恰も「重農主義」より一步出たスミスの進歩的意識と一層發達せる經濟學の範疇が必要だつたのである。國富論は單に富の理論に局限されてゐるのではなく、富の増進を阻止する一切の舊制度に對する革命的な批判の書である。このスミスにして始めて徳治主義的支那觀を批判克服して、支那社會の停滯性、腐敗、貧困崩壞等の必然性を明かにすることが出來たのであつた。

(註) スミスの國富論から資本家的な富の理論だけを求めようとする從來の方法は彼の支那研究の意義を理解し得なかつたし、

又それを全く無視して來た。國富論の進歩的、政治的意義を把握して始めて彼の支那研究の意義をも了解し得ると思ふ。かやうな見地からスミスの支那論をとりあげたものに、平野義太郎氏「解體を前にせる支那の經濟と社會」スミスの支那論（中央公論、昭和九年一月號）がある。本稿はこれに負ふところが多い。

スミスの支那社會經濟の分析に重要な意義を持つものは「進歩的状態」(Progressive state)に對比せられる「停滞的状态」(stationary state)の概念である。停滞的状态とは一國の富、從つて大衆の生活を支へる基金の増加が永らく靜止してゐる状態である。「支那は久しく停滞状態にあつた様に思はれる。支那は多分ずつと以前に其法規、制度に一致する富の全量をあげて獲得してしまつたのであらう。さり乍ら此の富の全額たるや、もし既存の法規、制度を廢止して他の法規をおきかへたならば、同國の土地と氣候と地位とで以て達し得られるであらうと思はれる富の程度より實に遙に低劣なのである。」³¹⁾「停滞状態にある社會では、勞働大衆に拂はれる勞銀基金、即ち住民の所得と資本とは不變であるから、毎年雇傭される勞働者數は殆んど同一で、勞働者の拂底と云ふことは起り得ない。むしろ勞働人口は與へられる職業以上に増加し、勞働者間の競争は激甚を極めて、勞働大衆の生活水準は押下げられるであらう。これについてスミスはデュ・アルド等の支那下層民の窮乏に關する記録をあげてゐる。これはケネーも同じく引用し乍ら、彼の支那禮讃論の故に、説明し得なかつた事實である。スミスの經濟學の體系の中では、支那の現實は資本、勞銀、停滞状態等の理論に關聯して見事に解明されてゐる。「支那の下層民の貧困は歐洲に於けるそれを遙に凌ぐ。廣東地方に於ては數百數千の家族は地上に宿るべき住家をも持たずに、河川、運河等の水面の小さな漁舟の中に年中住んで居ると一般に云はれてゐる。この地に於ける彼等の生活の糧は頗る乏しいので、歐洲の汽船が通つて最も汚い廢物でも海面に投げ捨てると、彼等は争つて拾ひ上げると云ふ。それ

31) Adam Smith, *Wealth of Nations*. edit. by Cannan. Vol. I p. 96-97.

故例へば犬猫等の屍體の半ば腐爛して惡臭のあるものでも、彼等には他國民の最も榮養價值ある食物同様に歡迎される³²⁾ケネー等が自然法に適へるものとして口を極めて禮讃した支那社會の悠久性と不變性は、こゝに「停滯性」としてその恐るべき一面を暴露されたのである。

支那民衆の生活を動物的水準にまで引下げてゐるものは、彼等を生産的に働かせる勞働基金、即ち産業資本の缺如であるが、さう云ふ停滯的社會にはまたこの産業資本の萌芽を喰ひつくし、生産的基金の蓄積を妨げる官僚階級や高利貸資本家が勢力を持つてゐる。富める者は生命、財産の安全を享受してゐるのに、貧しい者、又は小資本の所有者は殆んど何等これが安全を保證されるでなく、正義に託言けて何時にても下級官吏のために強奪、掠奪され易い國にあつては、國內に於て行ふあらゆる事業に投下されてゐる資本量は決してそれ等事業の性質や大きさが許すべき分量に等しい筈がない。この場合には如何なる部門の事業に於ても貧者を抑壓する事は必然富者に獨占を確保するに相違ない。富者は其國の事業を悉く壟斷してしひ、甚大なる利潤を獲得し得るに至るであらう。故に支那では一割二分が通常の金利だと言はれる。従つて資本の正常利潤はかゝる高率の利子を支拂ふに足るものでなければならぬ³³⁾。」

「停滯的」支那はその上部構造に「重農主義的」政府をもつてゐる。重農主義者ケネーが暴露し得なかつたこの支那的「重農主義」の祕密を、發達せる資本主義國イギリスの進歩的市民アダム・スミスが始めて明かにしたのである。それ故に「國富論」の第四編、第九章はケネーの重農主義に對する批判と同時に、支那的重農主義の分析をも含んでゐることは決して理由のない事ではない。スミスは既に近代に於ては農業のみが生産的でないこと

33) Smith, *ibid.* p. 97.32) Smith, *ibid.* p. 74.

近代國家はたゞ農業に對する課税だけで存在し得るものではない事を知つてゐた。それ故にスミスは重農主義、それと同時に商工業の壓迫と云ふ様な政策は停滯的農業國即ち支那、アジア諸國にのみ見られるものであることを知つてゐた。これらの國々では直接政府が大規模な治水工事、道路、運河等の建設に力を注いで、ヨーロッパ諸國以上に農業を保護、獎勵するが、これはアジアの諸國とヨーロッパの諸國の物的基礎を比較して見れば容易に納得出来る事柄である。「支那、インドスタン、其他アジアの諸國にありては、元首の收入は殆んど全部土地の年々の生産物、その年々の生産收益の多少につれて高低する地租や地代から上るのである。……然るに歐洲の如何なる部分に於ても元首の收入が主に地租や地代から上ると云ふことはない。従つて歐洲に於ては國家、元首はそれほど土地生産物の數量や價値の増加を助成し、立派な道路や運河の維持によつて、農産物に廣大な市場を提供する必要に迫られてゐない。」³⁴⁾更にスミスは言ふ。「これらの國々（アジアの諸國）の君主が農業の利益に特に關心を持ち、注意を拂つたのはまことに自然であつて、彼等自身の收入の年々の増減は直接農業の盛衰如何によるからであつた」³⁵⁾かくて支那的重農主義は農民の尊重ではなく、むしろ支配者の收入源泉たる農業の尊重であることが明かになつた。スミスによつて支那の統治機構を被ふてゐた王道樂土的、德治主義的外觀は殆んど残りにくく取除かれ、生々しい物質的な支那社會の骨格が姿を現したのである。

併しスミスは支那社會の「停滯性」を暴露したばかりではない。これに對して別に一つの對策を持つてゐたのである。それは即ち現在の支那政府が極度に輕蔑してゐる商業、殊に外國との自由貿易を開始する事である。外國貿易を開くとなれば、遠隔の地に運ぶには量大にして價值の少い農産物では不利であるから、運搬に便利な價

34) Smith, Wealth of Nations, Vol. II. p. 221.

35) Smith, ibid. p. 181.

値の大なる工業生産物を作らねばならない。商業の發展につれて、停滯せる支那は少しづつ動き出すであらう。スミスは他方で現在の政府の狀態ではこゝまで到達する事は困難であると言つてゐるが、ともかく彼は支那に對して一抹の希望を持つてゐたらしい。「支那の大なる内國市場に、世界の自餘の外國市場を附け加へる一層手廣い外國貿易は支那製造業を大いに發達、進歩させ、且つその製造工業の生産力を大いに改良し得るであらう。また一層廣く航海する事によつて支那人は今日世界のあらゆる部分に於て實施されてゐる技術、及び産業上の他の諸改良は勿論、他の國々に於て利用されてゐる一切の機械を自ら使用し、製造する技術までも自然に學ぶであらう。」³⁶⁾若き資本主義國のスミスが支那に於ける産業資本の發達に何等の恐怖を感じてゐないのは興味ある事實である。この態度こそ、高度資本主義の時代と異つて、全世界の、全人類の進歩のために戦つた啓蒙時代の闘士にふさはしいものであつた。このスミスの主張の中に啓蒙期に於ける支那研究の實踐的結論が見出されるのではあるまいか。

五 啓蒙期の支那研究の史的地位と意義

私は以上で啓蒙期のヨーロッパ特にフランスに於て、新しい支那研究が新しい歴史觀、國家觀、經濟學等と結びつき、如何に發展して行つたかを考察した。そしてこの研究の發展の基礎にはヨーロッパ社會の歴史的進歩、從つてヨーロッパ社會の支那社會に對する働きかけの進歩と云ふ事實がある事を指摘したのであつた。それではこの啓蒙期の支那研究は如何なる歴史的地位を占めるものであらうか。吾々は假りに支那研究發達史をゼスイッ

36) Smith, *ibid.* p. 179.

ト達の活躍せる早期資本主義の時代、啓蒙期、歐米諸國の支那市場に進出する時代の三期に分つとすれば、啓蒙期の支那研究は第一期の研究を第三期のそれへ媒介する重要な轉回點をなしてゐると言へる。この時代の支那研究はその資料に於いて前時代に依存するものとは云へ、この期の研究に固有の合理的、批判的精神を通過せざる支那研究は科學の名に値しないと考へる。前にも述べた様に、初期の支那研究に於ては、支那に派遣された宣教師が重要な役割を果してゐる。成程此時代の支那研究の背景になるものは商業資本時代の東洋貿易であるが、この時代の商人の低い知的水準や投機的な性格から、組織的な支那研究の生れる筈はなく、單にパンフレットの、實用主義的支那論を横行させただけであつた。従つてこの時代には何んと云つても一切の學問の獨占者たる僧侶階級、その遊撃隊である宣教師が支那研究を擔當したわけであるが、前述の様に彼等の宗教家たる地位よりして、自由な研究は妨げられざるを得なかつたのである。斯様な宗教家の立場に不可避的な制約を打破つて、新しい支那研究の端緒をうちたてたのは、歐洲に於ける新興市民階級の側に立つ思想家、特にアンシクロペヂストであつた。彼等の批判的、科學的精神は支那社會を偽裝してゐる舊い觀念を一掃して、その社會の實態に深く切り込む途を拓いたと言へよう。かくてこの時代の支那研究は支那專制主義、官僚的支配の特殊性、その父家長制的性格、儒教的觀念、及び典禮、習俗の社會的役割、支那社會の停滯性、政府の治水事業、其他重農政策の物質的根據等後世の科學的支那研究に缺くべからざる重要な概念を明かにし、又少くとも後世の研究に課せらるべき問題の所在を明かにしたのであつた。

この新しい支那研究の發達と不即不離の關係にあるものは、歐洲の市民社會の發展とそれが支那社會に對する

實踐の進歩である。即ち十八世紀に入つて産業社會の發達するとともに諸々の科學は宗教界から市民階級に向つて解放され、支那研究も亦後者の側に移つて行つたのである。殊にカトリック社會の實力を根底より破壊したフランス革命はかやうな支那研究の轉回に直接、間接の影響を與へてゐたと見なければならぬ。更にヨーロッパに於ける産業革命、産業資本の確立等の事情は、支那と歐洲との交渉を外交官、經濟使節の派遣や通商條約の締結等を通じてますます密接にした。かくてこれまで宗教的粉裝の下にかくされてゐた歐洲と支那との經濟的關係が次第に前面に現れ出したのである。經濟的交渉が次第に緊密化するに従つて、組織的な而も新しい世俗的、科學的見地に基く支那研究の行はれ始めたのは當然である。この時代に於ける歐洲と支那との關係の變革を象徵するものは、これまで支那との交通に比較的立遅れてゐたイギリスの進出であつた。イギリスは一八四〇—四二年の阿片戰爭を期として支那に向つて積極的攻勢をとりはじめるが、閉鎖された支那の舊社會の門戸を漸く叩き始めたのは一七九二年ロード・マカートニー (Lord Macartney) の派遣された時であつた。彼の旅行記は Sir George Staunton の著になる *An authentic account of an Embassy from the King of Great Britain to the Emperor of China*, London. 1797. に收められてゐるが、これはうまくでフランス物の翻譯に満足してゐた英國としては始めてのイギリス人の手になる組織的な支那見聞記であつた。³⁷⁾ かやうなイギリス産業資本の支那への進出時代を觀念的、思想的に豫告したものは「國富論」の中で、支那の停滯性を工業化によつて打破しようとしたアダム・スミスである。確かにスミスによつてこの時代の支那研究の目標がはつきり描かれた。併しスミスに限らず、啓蒙時代に於ける支那研究の多くは新しいヨーロッパ市民社會の働きかけを通じて、「停滯的支那」を「動く支那」にま

37) Richthoven, China. Bd. I. S. 694-696.

で發展させようとする意圖を持つてゐたと言へるだらう。實にかかる立場より、絶えず進歩的な意識と批判的な精神によつて貫かれた支那研究が生れて來たのである。

吾々は啓蒙期を去つて、支那研究に於ける第三期とも呼ぶべき時代に入る。この時代にはヨーロッパ資本のより高度の發展、その國際的伸張等の事情によつて既に啓蒙期に端緒を與へられた支那研究をますます實證的に豊富にする必要が感ぜられた。支那の地質、風土を研究するために多くの科學者が支那に派遣される。支那に駐在する各國の領事は、嘗つて宣教師のしたやうに、支那に關するリポートを本國へ送る。支那の關稅權を握る歐米諸國の稅關は支那の貿易ばかりでなく、國內の産業狀態についても豊富な統計資料を作成する。これらの支那に關する調査、研究の背後には歐洲の或は支那に進出した獨占資本、國家的に組織された巨大資本の力があつた。十九世紀後半に於ける最大の支那研究たるリヒトホーフンの『支那』の序文はこの間の事情を次の様に述べてゐる。「全く科學的旅行記の結果を公けにすることは莫大な費用がかかるものであり、また限られた讀者層に對してのみ發行されるものだから、私は公刊のきつかけをイギリスに作つた。イギリスでは莫大な通商、貿易を通じて支那の認識に深甚な關心が持たれて居り、實際的な要求に相應した私の資料を公刊し得る可能性を期待するところが出來たからである。だが私は他方で純粹な科學的、古生物學的、地質學的研究に對する本國政府の補助も收へて期待してゐたのである。併し、上海に於ける多くの貿易會社が出版費に心よく寄附してくれたにも拘らず、最初のプランはかねて豫定してゐた限定版のために實行不可能となつた。ところがベルリン帝室科學アカデミー及び文部大臣閣下の推薦によつて、皇帝陛下はかしこくも御内帑金——これには文部大臣及び商工大臣閣下

の補助金も附加された——の御下賜によつて私の勞作の公刊をかやうな體裁で成就させようと思召されたのである。⁸⁵⁾このリヒトホーフェンの序文は勞作の純科學的意圖にも拘らず、十九世紀末のヨーロッパ社會の支那研究は「外的には」如何なる勢力と結びつかねばならないかを示してゐるのである。

(註) ウイットフオーゲルはワゲナーの支那農業に關する研究 “Die chinesische Landwirtschaft” がドイツの人造肥料シンデケートの補助金によつて完成されたものである事を指適してゐる。(支那の經濟と社會、上卷、二九三頁)

十九世紀の後半から廿世紀へかけて歐米の支那研究は以上の様な社會史的背景を持ちつゝいよいよその内容を豊富にして行つた。啓蒙期にはむしろ理論が資料を解釋してゐたのだが、この時代には「實際的」な關心が複雑な對象自體へ直接に向けられ、蒐集された豊富な資料は支那研究の間隙を埋めつくした。併しこの時代に於て支那研究の完成を促進するものは、高度に組織化された歐米資本の要求だとすれば、またこの研究を制約してゐるのもさうした資本の要求なのである。加之、支那に於ける列強の政治的關係が緊迫してくるにつれて、各國の自由な支那研究は阻止され、狹隘な「政治目的」によつて制約されざるを得ない。かくてそれらの研究のゆたかな實證性にも拘らず、たゞ個々の資料を外面的につき合せるに止まり、それを通じて支那社會の基本的な動向を把握しないと云ふ様な支那研究の傾向が現れてくる。かやうに支那研究が卑近な「實際的目的」に従屬して、その進歩を阻止された時、吾々は廣く世界人類の進歩を目標として研究を進め、支那の進むべき道を指示するを得た啓蒙期の支那研究の意義を思はざるを得ないのである。且つこの時代の支那研究を一貫してゐた批判的、科學的精神の意義は如何なる時代にも高く評價されねばならない。殊に典型的な啓蒙期の思想的訓練を受けなかつた

ために、王道樂土的な支那論と實用主義的な支那論とが雜居してゐる様な國に於ては特にさうである。啓蒙期の支那研究はかやうな非科學的支那論を一掃した。そしてこの科學的研究の基礎にはヨーロッパ社會の内部における絶えざる批判的精神の湧出、舊制度の革新、支那に對する實踐の進歩等々の事情があつた。啓蒙時代に於ける支那研究の理論的内容ばかりではなく、斯様な社會史的背景の検討は、現代の轉換期に當面してゐる支那研究に意味深い暗示を與へると思ふ。

附記 私が「近世租稅思想史」の著述をしてゐる時、啓蒙時代の文獻にしばしば支那論の散在するのを認め、興味を感じて、これをまとめてゐる際に恰も後藤末雄氏の「支那文化と支那學の起源」の公刊に接した。これは丁度私の問題にしてゐる範圍とほぼ一致してゐたので（但しミスを除く）度々參考に供し、且つこの時代の支那研究の重要な事をいよゝゝ痛感するに至つた。本稿は前掲拙著の副産物であると同時に、後藤氏の著述に負ふところを多い事の附記しておく。